

---

# **俺が笑わない理由（仮）**

泡 照名

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺が笑わない理由（仮）

### 【NZコード】

N9475X

### 【作者名】

泡 照名

### 【あらすじ】

笑わない男、伊立秋作を、クラスの学級委員長の芹川由莉香が笑わせようと試みる。芹川に愛想笑いでもいいからと言われ、伊立は言われた通りに愛想笑いをした。すると、芹川は伊立に惚れて…

一話 僕が笑わない理由（前書き）

よろしくです。

## 一話 僕が笑わない理由

いつからだ？僕が、笑わなくなつたのは  
いつからだ？どんな事も、如何でも良いと思えてしまつようにな  
つたのは

そうか、あの時か。

「……作 秋作 起きろつて」

「誰だ。俺の眠りを妨げる奴は……」

俺は、寝ぼけ眼を擦りながら目を開けた。

寝起きなので、視界が霞んで良く見えない。

「……誰だ？」

「お前の唯一無二の親友だ」

「そんな奴いたか？」

「そりや、酷くないか？」

視界が元に戻ってきた。

今なら見える。

「こいつは

「『嶋柿』か……」

「『嶋柿』じゃない、山鳥木市だ」

俺は、伊立秋作つて名前だ。

そして、こいつは、本人が言つたように、山鳥木市と言つ名前だ。  
山を編にして、鳥をくつつけて『嶋』、木を編にして、市をくつ  
つけて『柿』、その二つを合わせて、『嶋柿』と呼ばれている。

嶋柿は、何だかんだでいい奴だ。

悩み事があれば聞いてくれるし、秘密は守ってくれる。  
たまに、ウザいボケをかましてくるのが玉に傷なんだがな……。  
まあ、笑いを取つてくるのは俺のせいなんだけどな。  
俺が……笑わないからだよな……。

今でも覚えている。

俺は、小学校四年生の時に、突然、笑えなくなつた。  
理由は、両親の死亡。  
泣いた。ずっと泣いた。一晩中、朝が来るまで泣いた。  
そこで涙は枯れ尽きた。  
笑うのさえ馬鹿らしく思えた。  
怒つても意味がないと悟つた。  
喜びといふ言葉の意味が分からなくなつた。

そんな時に出会つたのが嶋柿だつた。

嶋柿は、感情を忘れた俺に、感情を取り戻させてくれた。  
だが、俺は感情を表に出す事が出来なかつた。  
多分、事故のことを引きずつてしているんだろう。  
だから、俺の感情を表に出せさせようと、嶋柿は俺を笑わせようと  
てくれている。

だから……

「ありがとうな」

この言葉を親友に送る。

「急にどうした? 秋作

「いや、なんでも無い

「……?」

嶋柿は首をかしげながらも、唸<sup>うな</sup>ると

「ま、いつか」

と納得いかなさそつな顔で呟いた。

そして嶋柿は手に持つていた本を俺に見せる。

本には『理科』と大きく書かれていた。

「ほら、移動教室だぞ」

「ああ」

俺は嶋柿の言葉に一つ返事で答えて、机にもたれていた体を起こし、机の中をじごそと漁つた。

そして、嶋柿の持つている本と同じ 理科と書かれた本を手にとつて、椅子から立ち上がつた。

「そういえば、伊立君<sup>いだ</sup>が笑つてるのってみたこと無いような。私は焦点<sup>ひとみ</sup>合わない瞳で時計を見ながらそう思つた。

「由莉香<sup>ゆりか</sup>あ」

「ひえっ！な……何、奈々恵<sup>ななえ</sup>?」

「そんなに驚かなくとも……。何を物思いにふけつているのかと思つてね」

「伊立君が笑つているのってみたこと無いな……つて思つてね」

「まさか由莉香……伊立のことが……？」

「そんなことは無いよ。……ただ、学級委員として、クラスに笑つている人がいないのはどうか、と思って……ね」

「ほお。確かに、伊立が笑つているのは見たこと無いな～」

奈々恵はうんうんと頷きながら言つた。

「でしょ？だから、笑つてほしいな、つて思つたり、思わなかつたり……」

「まあ、伊立が笑わないのも、それ相応の理由があるんじゃない？人のことにあまり首を突つ込まない方が得策だと思うよ」  
それ相応の理由か……。

「ねえ、由莉香？」

「何？」

「そろそろ理科室に向かつたほうが良くなよくない？」

奈々恵が、時計を指差して言つ。

時計は、十一時四十七分を指している。

授業が始まるのは十一時五十分。

「そうだね、早くいかないと遅刻つけられちゃうね」

私は、机の上の用意してあつた、理科の教科書を手に取り、教室を後にして走つた。

## 一話 僕が笑わない理由（後書き）

一日一話登稿を心がけます、がどこまで続くのでしょうか?  
温かい田で見ていただければ幸せです。

## 一話 僕の愛想笑い

「キーンコーンカーンコーン……」

チャイムが休み時間の終わりと、授業の始まりを告げる。

「起立……」

誰かが言つた授業のあこさつの命令の声の途中で、扉がガラガラと音を立てて開いた。

「すみません……遅れました……」

切らした息を整えながら入ってきたのはうちのクラスの学級委員の芹川由莉香せりかわとその親友の奈々富ななみや奈々恵ななめぐだ。

芹川と奈々富は申し訳なさそうな顔をして奈々富は、平然とした顔で、芹川についているだけだが、空いている席を探している。

この学校では、移動教室の時は座席の指定が無いのでどこに座つてもいいことになっている。

そして、俺は目立たぬように、教室の一番端にあたる席（およそ、四人が横に並んで座れる席）に、嶋柿と共に横に並んで座つていて、俺の横には二つの空席がある。

もちろん俺の隣に好き好んで座りたがる輩やからはそうそういない。

だが、今日はいた。

俺は、ふと顔をあげて顔を確認する。

芹川と奈々富だった。

「伊立君、隣、いいかな？」

他に空いている席があるのに、物好きな奴もいるんだな、と思いつながらも、

「どうぞ」

と一言で返した。

芹川が俺の隣に座ると、奈々富も芹川の隣、つまり、俺の二つ隣に

座つた。

教室の前方では、教師が授業を行つてゐる。

「伊立君」

話しかけてきたのは、芹川だつた。

「何ですか？」

俺は、棒読みで返した。

「何で伊立君は笑わないの？」

「……」

一番聞かれたくない質問が来た。

「伊立は笑わないといつより、感情を表に出さないと言つたほうが正しいかな？」

俺の代わりに嶋柿が芹川に指摘した。

だが俺は、

「嶋柿、要らないことは言わないでくれ

と、嶋柿の方を、数秒見てから、芹川に視線を戻した。

「何故、『今』聞いたんですか？」

俺は、『今』の部分を強調して言つた。

「学級委員として、クラスに笑つていらない人がいるのは、どうかなつて思つて……」

俺は、今じやなくても良かつただらう、といつ思いを乗せた、ため息をついた。

「俺は授業に集中したいんで」

とりあえず俺は、授業に集中したかった。

今までの五分間、芹川との話に専念しすぎて、教師の話を何も聞いてなかつたから、ここで遅れを取らないためには、ここからの、教師の話は聞き逃すわけにはいかないと思つたからだ。

「笑おうよ。伊立君」

こいつ、人の話を聞いていたか？

「とりあえず作り笑いでもいいから笑おうよ」

俺は黙つて笑つて

営業用スマイルと言つたものだらうか

、をして、教師の話に耳を傾けた。

え……？あ……。

伊立君が、笑った？

いつものようにクールな雰囲気とは違つ、無邪気な感じで、『格好

かっこ

良く』ではなく『可愛く』笑つた……。

でも多分あれは作り笑い……だと思つ。

心の底から笑つた伊立君はどんな顔なんだろう？

正直言つて……見てみたい……。

「どうしたの？由莉香、顔真っ赤だよ？」

「ほ、本当に？」

奈々恵は前髪をかきあげ、私の額と、奈々恵の額を軽くぶつけた。  
「熱は無さそうだね。……もしかして、伊立にひどいこと言われた  
？」

「違うの……そんなんじゃないの」

この気持ちをどう説明すればいいんだろう。

モヤモヤと言うつか、ドキドキと言うつか……。

「由莉香、まさかやつぱり、伊立のこと……」

「わからない……。なんて説明すればいいんだろ……」

「どうこう」とかわからないけど、話は後で聞くよ。とりあえず、  
席、替わろうか？伊立の横じや、色々と氣まずいでしょ  
私は無言で頷いて、奈々恵と席を交代した。

## 二話 僕の名前

授業が終わり、教室に戻つて、私は奈々恵に大体の事情を説明した。

「……それで、伊立のその笑顔を見て、伊立のこと好きになつたこと？」

「好き、って言つたか、どういえばいいんだろう？」

(それを恋つて言つんじゃないか?)

「ん?なんか言つた?奈々恵」

「いや、何でもない」

…?奈々恵は、何を言つたんだろう?

「それで、その笑顔はそんなんに可愛かったんだ」

「うん。何ていうか、いつもと違う感じで……。ギャップかな?」

「ほお。確かに、伊立の笑顔はあたしも見てみたいねえ」

「でしょ?だから、伊立君をもつと笑わせたい、もつとあの笑顔が見たい、心の底から笑つてもらいたい」

「良いねえ、青春だねえ。……よし、それならあたしも一肌脱<sup>うでまく</sup>いふではないか!」

奈々恵は腕捲<sup>うでまく</sup>りをして立ちあがつた。

私は伊立君の前に立ち、奈々に言われた通りの言葉を言った。

「伊立君」

「何ですか?」

「伊立君の下の名前つて秋作だよね」

「そうですけど……何か?」

伊立君は半眼で睨んできた。

「秋作君、つて呼んでいい?」

「理由を求めます」

「り、理由?...び、どうしようか、えーっと……。」

「理由が無いならやめて下れ!」

「伊立君と仲良くなりたいから……」

「じゃあ、まず『痴』を付けるのをやめたうりどうですか?」

「じゃあ、『伊立』つて呼べばいいの?」

「はい。それじゃあ、俺は用事がありますので、  
伊立君は、踵きびすを返して、私から離れて行つた。

「と、言ひわけなんだけど……」

「由莉香、それじゃ、距離を縮めるビーナスか、むじり距離が遠ざか  
つてるよ」

「だよね。……どうすればいいんだう?..」

奈々恵は腕を組んでしづらしく唸ると、自信有り氣きに口を開いた。

「よし、良い考えを思いついた」

奈々恵は、薄い胸を張つて立ち上がった。

## 四話 僕とタメ口と人間関係

只今、午後一時、十二分。<sup>ただいま</sup>

五限日が始まるまであと十三分。

あまり時間は無いが、今俺がいる、一階の渡り廊下から、二階の教室に戻るには十分な時間だ。

そんなことを考えながらも俺は教室に向かっていた。

「おーい、伊立」

ふと、後ろから声がかけられた。

俺が振り返ると、そこには奈々富<sup>奈々富</sup>がいた。

珍しく一人なのか、と思つたが、話を長くしたくは無かつたので、口には出さなかつた。

「何ですか？」

俺は、いつも通りの言葉で返事をする。

「あなたは由莉香のこと、どう思つてるの？」

由莉香……？ああ、芹川のことか。

「『どう』とは？」

「まあ、好意を持つてるか持つていいかだよ。簡単にいえば、好き嫌いがだね」

「どちらでも無いですね。無関心、つてところでしょうか？」

「へえ……。由莉香はあなたのことが好きみたいだけね」

この女はそれを俺に言つてどうじると言つんだ？

「そうですか」

「あれ？反応無し？」

「無関心、と言つたはずですけど？」

「へえ。そつか、じゃあね」

何だ、奈々富の奴、それだけを言つたために来たのか？

「伊立、敬語はやめなよ、タメ口でいいよ」

奈々恵は去り際に言つて、どこかに行つた。

「タメ口……か……」

「そうか、そう言えれば、今はタメ口は嶋柿にしか使つてないな。

「悪くはないな……」

「俺は時計を見た。

午後一時二十三分。

「さて、少し焦るか

俺は、教室に普段より少し足を速めて向かつた。

私は、教室の窓にもたれて、時計を見た。

午後一時二十三分を時計の針が指し示している。

「ただいま」

と、不意に後ろから肩を軽く叩かれた。私が振り返るとそこには奈々恵がいた。

「おかれり、どこ行つてたの？」

奈々恵は私から目をそらした。

「秘密だよ

ばつが悪そうな顔で奈々恵が言つた言葉に私はこいつ返した。

「伊立君の所……じゃないよね？」

「そんなわけないよ、違うよ

「じゃあどこ？」

冷や汗をかいている奈々恵に詰め寄る。

「ブ、プライバシーの侵害だよ。い、いくら親友の由莉香でも言へないことが……」

「……」

私は半眼で見詰め続ける。

「……い、伊立君のところに行つてました……」

奈々恵は両手をあげて言つ。

恐らく『参りました』の意味を込めて、両手をあげたのだろう。

「何を言つてきたの？」

「さすがにそれは……」

奈々恵は再び皿をそらす。

「まさか……」

私がそう言つと奈々恵は唾を飲み込んだ。

「奈々恵も、伊立君のことが……」

奈々恵の顔は紅潮し、奈々恵の口からはこんなセリフが飛び出した。

「違うよ、伊立に由莉香が伊立のことを好きだ、って言つただけで

……

「えつ……」

奈々恵は両手で口を押さえて、しまった、と言いたげな顔をしている。

先程まで赤かつた顔がみるみる内に、青くなつていいく。

「バカ奈々恵――――――！」

「『めんつて、由莉香！伊立の気持ちを知つといった方がいいと思つて……』

私は深呼吸をして落ち着きを取り戻そつと図る。

すう……はあ……

「……で、どんな返事が返つてきたの？」「

「き、聞くの？」

私はうん、と言つて首を縦に振る。

「本当に？」「

「何をもつたいぶつてるの？……まさか、伊立君は私のことが嫌い

……とか？」「

「はずれ」

「……といつことは、伊立君は私のことが……す、好き……なの？」

私が言うと、奈々恵は大きくため息をついた。

「残念ながら、それもはずれ」

「？……じゃあ、どうこう」とへ。

「無関心、だつてさ」

「無関心……」

と言つ」とはつまつ……

「嫌われているよりはマシだね」

（何とポジティブな……関心すら持つてもらつてないんだよ……）

「ん？なんか言つた？奈々恵」

奈々恵が小声で何か言つていたみたいだけ、聞き取れなかつた。

「何でもないよ」

「教え」

「キーンゴーンカーン……」

私の言葉はチャイムに遮られた。

「さあ、席に着こうよ。由莉香」

奈々恵は私ではなくて、左を 奈々恵から見て右を 見てゐる。

「う、うん」

奈々恵の視線の先では、伊立君と山鳥君が話していた。  
え？あれ？まさか……奈々恵、伊立君のことが……？

## 五話 僕の性格と説得

五時間目が終わり、休み時間が始まった。

みんなが各自で散り散りになつて話している。

そんな中、俺はふと芹川と奈々富のことを考えていた。

全く、何なんだ？芹川と奈々富に俺は何か悪いことをしたか？

「どうしたんだ？秋作、さつきから何をブツブツ咳いているんだ？」

不意に嶋柿に話しかけられた。

「声に出てたか？」

「ああ。『芹川が～』とか、『奈々富が～』とか聞こえたけど」

嶋柿なら信用できるから、相談してみるか……。

「最近、芹川と奈々富に執拗に話しかけられるんだが……」

「別に良くないか？」

女子に話しかけれない奴がいる中で、クラス一番　いや学年一番と言われている美少女達に話しかけられているんだぞ？

「そういうものか？」

「そういうものだろ。で、何を言われたんだ？」

「俺のことが好きだ、って言う冗談を……。」

一瞬、嶋柿の顔が強張る。

そして、真剣な顔に戻し、いつ告げた。

「どちらに　だ？」

「奈々富に

「そうか」

嶋柿は大きな溜息をついた。

そして、俺は詳しく説明を続ける。

「奈々富が俺に『芹川は俺のことが好き』って言つたんだよ」

再び、嶋柿の顔が強張る。

俺は構わず続ける。

「俺みたいな性悪男を好きになるはずなんて無いよな  
普通に好きになるんじゃないか?」  
……。

少しの間、俺は沈黙した。

そして、嶋柿を諭すようにこいつ叫びた。

「アホなこと言うなよ。嶋柿」

「アホなことを言った覚えは無いし、嶋柿でも無い  
「じゃあ何だ?笑いもしない俺を好きになる奴がいるとも聞いた  
いのか?」

「そうだ。『笑わない』イ『ホール』『好きにならない』ってわけでは  
ないだろ」

無意識に俺の口から深い溜息が出た。

「嶋柿」

「山鳥だ」

「普通の女が好きになるとしたらお前の方だろ」「  
何故だ?」

嶋柿は何のことかわからぬ、と言いたげな表情で首をかしげた。

そんな嶋柿に言い聞かせる様に俺は続けた。

「面は良いし、勉強も運動も出来るし、嶋柿がモテないはずが無い  
だろ」

「解せないな。性格は置いといて、面や勉強や運動はお前の方が出  
来るだろ。そして、俺は山鳥木市だ」

「仮に俺の方が性格以外の部分が良いとしても、この性格だぞ。こ  
の性格が全てダメにしている」

「別にお前の性格は悪くは無いだろ」  
……。

俺は再び沈黙した。

嶋柿の方を見ると、俺は可笑しなことを言つたか、といつ心の声が、  
嶋柿の顔を見ただけで分かつた。

「悪くは無いと思うんだが」

何の躊躇もなく嶋柿が言つ。

これは、嘘の言葉ではない、嶋柿の心から出た本当の言葉だらう。

「俺の性格なんて、人類最悪だろ」

少し大袈裟おおげさに俺は言った。

すると嶋柿は苦笑して、こう告げた。

「そんなに大したものじやないだろ」

「今のは言いすぎたかもしれないけど、俺の性格はかなり悪いと思<sup>うぞ</sup>」

「秋作は悲觀的過ぎる。悪いのは秋作じゃなくて、あの事故じやな  
いか?」

嶋柿が言つた事故と言つのは、俺の両親の死因の交通事故のことだ。  
「でも、この性格を直そつとしない俺も悪いんじやないか?」

「かもな」

嶋柿は反論しなかつた。

そしてこつ続けた。

「でも、全部が全部、お前の所為せい、といつわけではないだろ」

「ムウ」

俺は言葉に詰まつた。

嶋柿は俺の反応を見て、続ける。

「何でもかんでも自分の所為にするなよ。たまには人に責任を押し  
付けてもいいんだ」

「だけど、それは綺麗事過ぎないか? 嶋柿」

「思考は自由だ。少なくとも俺はそういう考え方、ってだけだ。そし  
て何度も言つが、山鳥だ」

その考え方があまり理解できない。

だが、世界は俺と同じ考え方の人しかいない訳ではない。  
むしろ、俺と違う考え方をする人の方が多いだらう。

「何か良く分からぬが、納得した」

「分かってくれりやいいんだ」

良く分からぬが、解決した……と思つ。

俺は時計を見る。

六時間目が始まる一一時一十五分まで、あと一分。

「さてと、あと一時間頑張るか

俺は咳いて、伸びをした。

## 六話 僕と枕女

六時間目が終わり、皆、帰宅の準備をしている。

一方、私は奈々恵に言われたことを実行しに伊立君の席に向かっている。

隣には奈々恵がいる。

伊立君と一緒に帰ろうと誘いなさい、と奈々恵に言われたからだ。奈々恵がついてきているのは山鳥君を引き離して、私と伊立君を一人きりにする為らしい。

「伊立君。ちょっと良いかな？」

「何でしようか」

いつも通りの仏頂面で伊立君は返事した。

「一緒に帰らない？」

伊立君は頬杖をつき、考えるような仕草を見せた。そして、頬杖をやめ、私に問いかけてきた。

「共に帰つて、俺に何の利点があるのでしようか」「利点つ？」

そんなの考えてなかつたよ。  
えーっと……。

「秋作」

伊立君の声でも、奈々恵の声でも無い声が聞こえた。  
声のする方へ顔を向けると山鳥君がいた。

「お前、本当に損得で動くなあ。女子にそいつの話を頼まれたら、  
断つちゃだめだろ」

「別に断つてねえよ」

「そんな嫌そうな顔でそんなこと言つたら、断つてるのと一緒にだ

る」

伊立君は右手で顔を触つてから、断つてるのと一緒にだ

った。

「そんなに嫌そうな顔、してたか？」

「してた」

山鳥君に言わると、伊立君は申し訳なさそうな顔をして、「すみません」

「私は謝つてきた。

「そ、そんな迷惑に思つてないよ」

私は全身で否定をした。

「と言うか」

話に割り込んできたのは奈々恵だつた。

「敬語はやめろって言つたはずでしょ。伊立」

「あれは奈々宮、お前にだけかとおもつていたが」

「あれはあたしだけに、じゃなくて、由莉香にも、つことだよ」「そうか」

伊立君は私の方を向いてこう言つた。

「じゃあ、何か良く分からなが、一緒に帰るか。芹川」「は、は、はい」

とまあ、何だかんだで、奈々宮と嶋柿の口車くちぐるまに乗せられて、四人で一緒に帰つている。

右から、嶋柿、俺、芹川、奈々宮の順に横に並んでいる。

「なあ」

俺の右から声がした。

嶋柿だ。

「何で急に俺たちと一緒に帰るとか言いだしたんだ?」

嶋柿が言つたのは芹川と奈々宮に対しての質問だらう。この質問は俺も聞いたかつた事だ。

「何となくだよ。何となく」

曖昧な答えを返したのは奈々富だつた。

「そうか」

これ以上聞いたところで、どうせ曖昧な答えしか返つてこないと踏んだのだろうか、嶋柿は深くは聞かなかつた。

そして、話している間にも、いつも嶋柿と別れる十字路に着いた。

「じゃあ俺はここで」

嶋柿は手を上げて、別れることを俺たちに示した。

「じゃあ、あたしも」

「ちょっと待つて、奈々恵。奈々恵はこっちからの方が近」

「じゃあね。由莉香、伊立」

芹川の言葉を遮つて、奈々富は嶋柿についていった。

「ちょっと、奈々恵！」

そんなに俺と帰るのが嫌なのか。

「ついていつたら良いんじゃないのか？」

「えつ」

芹川はきょとんとした顔をしている。

「何故？」

「俺と帰るのが嫌なんだろ？」

「いや、違うの」

芹川の顔が紅潮する。

「まさか」

「つー」

「つー！」

芹川は驚きと恥ずかしさが混ざつた顔をしている。

「好きな人いる？」

「つー！」

芹川の顔が、これでもか、といつ程、赤くなる。

「それって

「つー！」

俺は少し間を開けて、言つた。

「嶋柿か？」

「へつ？」

再び、芹川はきょとんとした顔に戻る。

だが顔の紅潮が治まるには時間がかかるようで、顔はまだ赤い。

俺の読みは違ったのか？

「何故？」

「何故、ってどういうことだ？」

「あ……う……グスツ」

芹川は泣きだした。

「ど、どうしたんだよ」

「う……ごめんね……ちょっと……一人で帰らせて……」

芹川は一人で駆けて、帰ってしまった。

「ちょっと待てよ！芹川！」

俺が何か悪いことをしたか？

思い出せ。俺は……。

「由莉香はあんたのことが好きみたいだけどね」

「そうか、あれは本当だったのか。

「あ～あ、泣かしちゃったね」

不意に、声が聞こえる。

女性の声だ。

俺は辺りを見回す。

しかし、何もない。

「空耳……か？」

「違うもん！ここにいるもん！」

俺は下を見た。

そこには枕を持ち、うちの学校の制服を着た小さな女がいた。

いや、でもうちの学校の制服を着てるし……。

迷子だろうか？

「そいや！」

枕女は持っている枕を俺を狙って振りまわした。

俺は枕を左腕で防いで、空いている右腕で枕女から枕を取りあげる。

「何するの。それ私のだもん！」

「ふざけるな。いきなり枕で殴ってきた奴が何を言つ

「返せ。それは竊盜だもん」

枕女はジャンプをして、必死に枕を取り返そうとしている。

俺は、届かないように枕を高く掲げる。

「分かった。返すから、俺を殴るのをやめて家に帰れ

「分かったから返せ」

枕女はジャンプを続ける。

本当に分かっているのだろうか？

「はいよ

俺は、枕を上に投げた。

「なつ！？」

枕女は上を見て、枕の落下地点に走り出す。

その隙を見て、俺は全速力で、枕女から逃げた。

枕を取り終えたのだろうか、後ろから、ばかー、と聞こえたが、聞こえないふりをして俺は駆けた。

俺は思わずため息をついた。

変な奴に絡まれたな、と呟いて、家路を駆け続けた。

七話 僕の親が死んだ理由（前書き）

嶋柿視点の話です。

## 七話 僕の親が死んだ理由

嶋柿視点

芹川と秋作と別れ、家路と共に歩いているのは奈々富だ。

「なあ」

「な、なに！？」

そんなに驚くほど大きな声で言つたか、と思つたが口には出さず、小さな声で、続けた。

「奈々富。お前は秋作と芹川にくつついて欲しいと思つたか？」「う、うん。そうね」

ん？明らかに奈々富の様子がおかしい。

そう言えば、顔が赤いし、喋り方も変だ。  
如何した。奈々富。顔が赤いぞ

「そう、かな？」

何故があわてて顔を隠す奈々富。

「熱でもあるんじゃない？体の節々が痛い、とか無いか？」

「違うよ。大丈夫だから」

とりあえず、奈々富の額に右手を伸ばす。

「ひやう！」

奈々富は驚いた様子で悲鳴（？）をあげた。

俺は特に気にせず、左手で、自分の額に触れ、温度の差を計る。

「熱……は無さそうだな」

では何故、顔が赤いんだ？

「そ、それよりさ」

奈々富が強引に話を切り替えた。

「どうした？」

俺は強引に切り替えられた話に逆らわず、便乗した。

「嶋柿君って好きな人いる、かな？」

遂に、伊立が俺に付けたあだ名が伊立以外の奴にに定着してしまつ

ていたようだ。

「いない、と言えば嘘になるかな？」

「……」

奈々富は、複雑な顔をしている。笑顔は笑顔なのだが、何か作り笑いが五割くらい含まれているような、そんな笑顔だ。

「あと、言つておくれど、俺は山鳥木市だ」

「あ、ごめんね」

「山鳥か木市つて呼んでくれると嬉しいかな？まあ、嶋柿以外なら何でもいいが」

これ以上、嶋柿、と言つあだ名を広げないためにここで喰い止めておかないとな。

「じゃ、じゃあ木市、で良いかな？」

「おう」

「え、えつと、き、木市君……」

奈々富の顔が紅潮していく。

耳まで赤い。

「やつぱ駄目！山鳥君つて呼ばせて」

「嶋柿以外なら何でもいいだ」

奈々富はうん、と頷く。

顔の赤みは引いていないが、落ち着いてきたようなので、奈々富がおそらく聞いていなかつたであろう最初の質問をもう一度聞きなおすした。

「もう一度聞くが、お前は芹川と秋作にくつづいて欲しいと思つか？」

「そうだね。由莉香は伊立のことが好きみたいだから、親友としてくつづいて欲しいと思うね」

「じゃあ、芹川が伊立を好きになつた理由は？」

「愛想笑い、だつてや」

……？

「それ、どういう意味だ？」

奈々富に大体の事情を説明してもいい。

「つまり、芹川は秋作の笑つた顔に惚れて、本当に心の底から笑つて欲しい思つたわけか」

「そう。だからいろいろと頑張つているみたいなんだけど、伊立が鈍感すぎて由莉香が空回りしてゐるんだよ」

「まあ仕方ないさ。あいつは愛される、といつことあまり知らないからな」

奈々富が何のことかわからない、と言いたげな表情を浮かべる。  
もしかして、秋作と俺以外は秋作の親が死んだことは知らないのか？

「奈々富。秋作の親のことは知つてゐるか？」

「伊立の……親？」

「知らないか」

「何？伊立の親がどうかしたの？」

「誰にも言つなよ」

奈々富が頷いたので、あの日の交通事故のことを話した。

「だから、あいつは愛といつものを知らないんだ」

奈々富は驚愕の表情を浮かべていた。

「その事故つて……！」

「何か知つてゐるのか？」

「由莉香のお父さんが交通事故を起こした日時と場所が同じ……」

「つ……！」

つまり……それって……。

「秋作の両親が死んだ原因は……芹川の父親なのか……？」  
ポツリ、ポツリと雨が降り出した。

俺と奈々富は雨宿りをしに、屋根のある店の前に走った。

この事實を秋作に伝えるべきなのだろうか？

「由莉香にこの話、伝えた方がいいのかな？」

「どうやら、奈々富も同じことを考えていたようだ。

「とりあえず、これは黙つておこう。話すのはタイミングを見計ら

つてだ

「わかつた」

奈々富は俺の方を真っ直ぐに見て、頷いた。

「とりあえず、連絡が取り合えるよ、携帯の電話番号を教えてくれ

「え？ あ、うん！ あ、そうだ。由莉香のも教えるね

「あ、ああ。じゃあ俺も秋作の番号も教えるよ」

俺は携帯電話の画面からふと、眼を離し、空を見た。  
どんよりと黒い雲が、青空を遮り、見えない。

雨脚は弱くも、強くもなっていないが、雨は止みそうになかった。

## 八話 僕の謝罪と芹川の涙（前書き）

すいません、登校が一日一話のはずが、一日遅れてしまいました。

## 八話 僕の謝罪と芹川の涙

枕に顔をうずめ、私は唸つていた。  
どうしよう。

きつと、伊立君に嫌われちゃった……。

……どうしよう……そうだ、奈々恵に電話してみよう。  
そう考え、私は携帯電話を手にとった。

「ピリリリリリ」

私が携帯電話を開く前に電話が鳴つた。  
画面には知らない番号が表示されている。

私が電話に出ると、聞きなれた声が聞こえた。

『芹川か？俺だ。伊立だ。伊立秋作だ』

「い、伊立君！？何で私の携帯の電話番号知ってるの！？」

『嶋柿から聞いた。嶋柿は奈々富に聞いたんだとよ』

と言つことは奈々恵は伊立君の番号を知つてゐるのかな？明日聞いておこう。

「へ、へえ。そ、それで何の用？」

『とりあえずお前に謝る。すまん』

「な、何で伊立君が謝るの？」

『奈々富から聞いたんだが、芹川。お前、俺に好意を抱いてるんだ  
つてな』

「え？あ、あ。うう……」

『それに気付いてやれなかつたんだ。謝らせてくれ。すまん』

「わ、私が勝手に想つていたのが悪いんだし、伊立君が謝る必要は  
無いよ」

『そういうつてもらえたら嬉しい』

「どういふか、何で伊立君は怒つてないの？」

『怒る？何で怒らなければならぬんだ？』

「……怒つてないの？」

『怒つて欲しいのか？』

「ち、違うよ！」

私は全身で否定するが、電話越しに「はわら」といふ言葉付き、途中で止めた。

「私はそんな特殊な趣味は持っていないよ」

『冗談だ』

「そんな分かりにくい『冗談はやめてよ』

『一割ぐらい冗談だ』

「残りの九割は！？」

『真心だ』

「バファーリンみたいだね」

『まあ、こんな冗談は置いといて……。良かつた。元気そうだな』  
とりあえず、怒つていまいちだから良かつた……。

「ありがとう」

『何がだ？』

「私を笑わせようとしてくれたんでしょう？」

返事は帰つてこない。

「だから、ありがとう、って言わせて」

『分かつた。そして、実は伊立じやなく嶋柿だつたというオチで……』

……

「嘘！？」

『ハハ、冗談だよ。じゃあまた明日な』  
私がじやあねと言つと電話は切れた。

……伊立君、笑つてなかつた？

うん、確かに笑つてた。

……そもそも、伊立君が笑わない理由つてなんだろう？

切った携帯電話を片手に俺は考えていた。

俺、今、笑ったか？

いや、まさか、そんなはずは無いだろ。でも、笑っていたとしたら、俺はあの事故のことを忘れることが出来ていると言うことになるよな。

「よしひー。」

事態は今のところ良い方向に転がってきている。

俺が普通に笑える日も近いかもな。

俺は携帯電話を机の上に置き、風呂場に向かった。

お風呂からあがつた私は、タオルを頭に乗せ、パジャマのボタンを留めながら、携帯電話を握っていた。

「プルルルルル」

これは着信音ではなく発信音なのは私が掛けたからだ。

『ガチャ』

「もしもしし？奈々恵？」

『由莉香。どうしたの？』

「さつき、伊立君から電話がかかってきたんだ」

『お。良かつたじやん。その調子で頑張れ』

奈々恵は私のことを自分のことの様に喜んでくれた。

やつぱり、奈々恵が親友で良かった、と痛感させられた。

「奈々恵は、伊立君や山鳥君の電話番号持つてるの？」

『持つてるけど、なんで？』

『じゃあお互い頑張りうね』

『何を？』

『恋、だよ』

『んなつ！？べ、別に私は好きな人はいないよ』  
上擦つた声で奈々恵が言つ。

「いつもより声のトーンが高くなつてるよ」

『な、なつてないよ！』

「ほら、今のも高かつたよ」

『ム、ムムム……』

私は微笑み、すぐに表情を元に戻し、奈々恵に尋ねた。  
「ところで、話は変わるけど、伊立君が笑わない理由って知つてる？」

『つー……知らないよ』

「……本当？」

奈々恵は少し沈黙して、こう言つた。

『……ごめん、知つているけど奈々恵には言えないんだ』

「……どうして？」

『……ごめん。それも言えない』

「……もういいよ。切るね」

『ちょっと待つて。私は由莉香の為に言つてないだけなんだよ』  
慌てたように奈々恵が言つ。

「どういう意味？」

『本当のことを知つたら、由莉香がどうなるかわからないから  
「どうなつても良いから本当のことを教えてよ』

『ごめん。言えないんだ』

『ブツツ』

私は電話を切つた。

「バカ」

私たちの友情はそんな薄っぺらいものだつたんだ。  
親友だと思っていたのは私だけだつたんだ。

『奈々恵の……バカ……』

枕が濡れていた。

目からは涙がこぼれていた。

窓の外では雷鳴とともに雨が降っていた。

## 九話 僕と嶋柿と眞実

今日は土曜日だが、うちの高校では日曜日以外、学校があるので俺は学生服を着ている。

朝食は制服を着る前に済ませた。

俺は鞄を手に取り、家を出て、鍵をかけると後ろから声が聞こえた。

「おはようさん。秋作」

声のする方へ振り向くと嶋柿がいた。

同時に、雨が降っているのが確認することが出来た。

「どうした？ 嶋柿」

いつもなら、俺が嶋柿の家まで迎えに行つてから登校するはずなのだが、今日は俺の家に嶋柿が迎えに来ている。

「いつもより早く起きたんだな」

あれ、嶋柿って言つたのに突つ込まねえな。

「そして、嶋柿じゃない山鳥木市だ」

あ、突つ込んだ。

「いい加減その呼び方やめてくれよ。昨日、奈々宮にその呼び方で呼ばれたんだぞ」

「良いじゃねえか。逆に何が嫌なんだ？」

「何となく嫌なんだよ」

「まあ、そう言われても、今更変える気は無いけどな」

「ああ、そうかい」

なんでだよ、とでも言つと思つたけど、もう諦めているみたいだ。

「なあ、秋作」

「何だ？」

「もしも、お前の知り合いがお前の両親が轢かれた車の持ち主だったら……どうする？」

「知つているのか？」

「もしもの話さ」

嶋柿は否定しなかった。

これは、何か裏があるな。

「謝罪を求める。それ以外は何も要らないさ。金で俺の両親が返つてきたりはしないからな」

「それでいいのか？」

「俺と、俺の両親に謝つてもらえれば、それで満足だ」

「そうか。なら……」

覚悟を決めた表情で嶋柿が言った。

「秋作、お前に真実を言おう」

俺は、嶋柿から芹川の父親が俺の両親の命を奪つたことを聞いた。

「芹川の親、だつたのか」

嶋柿は俺の顔をのぞいて俺の表情をうかがおつとしている。

「こんな話、しなかつた方が良かつたか？」

「むしろその逆だ。ありがとう嶋柿」

「山鳥だ」

俺はその事について、恨んでいなかつた。

普通なら恨む気持ちがあるものなのだろう。

けど、何故か、恨めない。憎めない。

誰かに感情を制御されているような、昔の記憶が薄れてしまつているような。

そんな不思議な感覚に見舞われた。

「どうした？」

俺は嶋柿の言葉で我に返つた。

「いや、何でもない。そんな事よりさ……」

俺は首を振つて、強引に話を切り替え、通学路を辿つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9475x/>

俺が笑わない理由（仮）

2011年12月1日21時54分発行